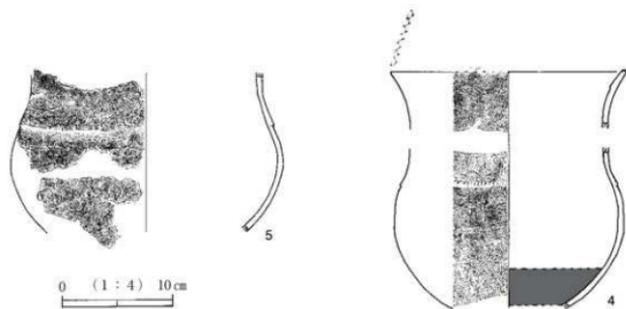
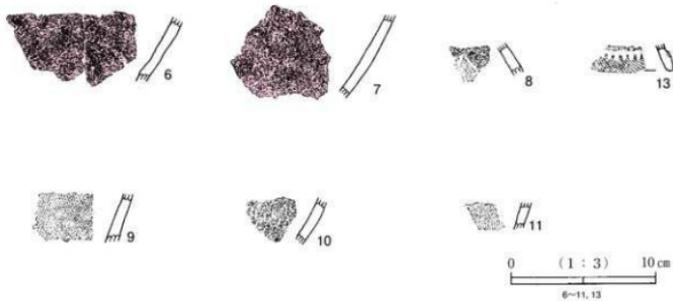


支脚転用時

支脚転用時



0 (1:4) 10 cm  
1-5



0 (1:3) 10 cm  
6-11, 13

第18図 06D 出土遺物

## 第2章 平沢遺跡a地点の調査

3は東関東系。頸部無文帯を扶んで、口辺と胴部に地文として附加条縄文を施文する。この後、口縁下に横位二列の円形竹管による刺突列を施し、それをまたぐ形で縦長の貼瘤（縮状の突起）を廻らせる。本例は小形甕の略完存品。04D5のミニチュア版であるが、諸属性は一切省略されていない。

9～11は甕の胴部片。附加条縄文を地文として施文するものである。

### 07D（第19図～第20図）

位置 L1・L2グリッドにまたがる。重複関係 単独。主軸方位 N-59°-W。平面形 やや不整な隅丸方形を呈する。規模 3.21m × 2.85m。遺構確認面からの深さ0.56m。壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床 ハードルームまで掘り込んで床とする。踏み固めているとはいえ、硬化範囲と認定できるほどではない。これに対して、床面中央及び南西コーナー付近はやや軟化している。周溝 南西コーナーから、南壁にかけて廻らす。炉 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。ピット 1本のみ検出されたP1は、位置的に見て、出入口に伴うピットの可能性がある。覆土 5層に分層できた。全てが人為的な埋め戻しである。ただし、完全に埋め戻すまでには、少なくとも二回（5層上・2層中）の廃品の廃棄を行っており、その時は一時的に埋め戻しを中断している。遺物出土状態 二回の「廃棄行為」が認められた。一回目の廃棄は、腐材の焼却行為及び消火活動の後で大破片が多く、二回目は小破片が中心となっている。なお、本跡の東壁外に約1.4m離れて土器片類の地点分布が認められた。これらの垂直分布は、現在の遺構確認面である、ソフトルームよりも0.05m～0.10m程上部に集中し、基本層序のIV層（暗褐色土）の上部～最上部に相当する。また、接合の結果、地点分布内で接合が見られるだけでなく、07D出土遺物と同一個体が含まれていた。以上から、土器類が検出されたレベルが、弥生時代後期時点の旧表土面であることと、地点分布自体が07Dへ廃棄される以前に、一旦廃品が集積されていた場所の可能性が高くなった。建て替え 認められなかった。備考 本跡は、04ADと同様に印跡が検出されなかった。なお、本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは、以下のように想定される。

①廃絶後の上層などの解体→②腐材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（5層）→④廃品の廃棄行為（5層上）→⑤埋め戻しの土砂投棄（2層～4層）→⑥埋め戻しの一時的中断と廃品の廃棄行為（2層中）→⑦埋め戻しの完了（1層）

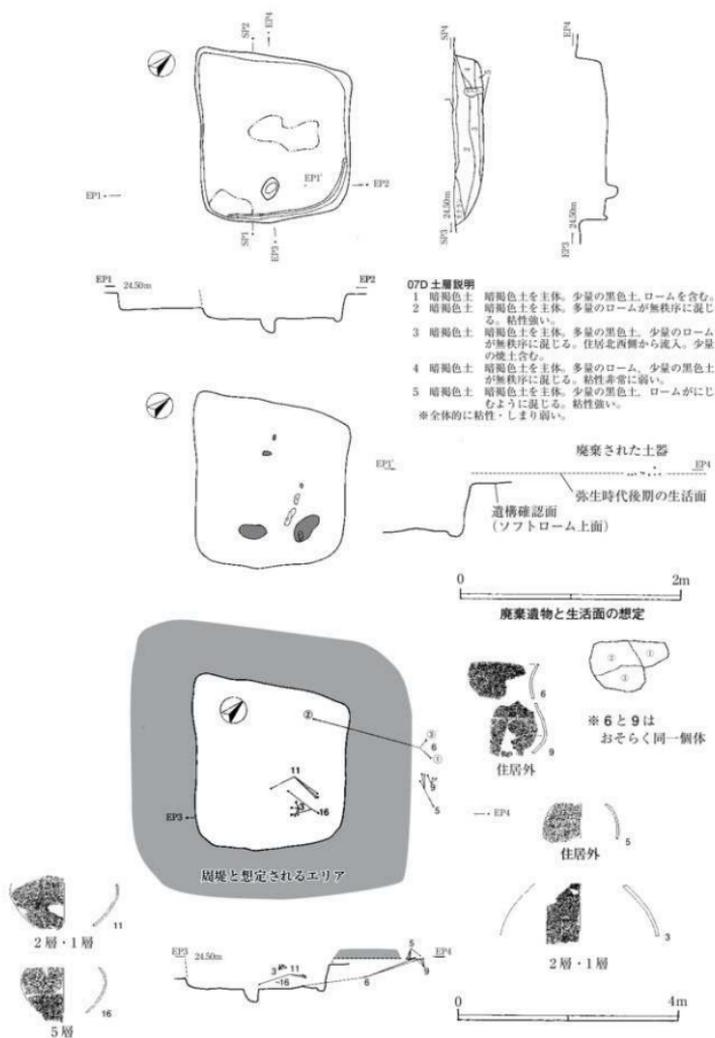
### 出土遺物（第20図）

出土総数は506点（弥生土器495、縄文土器10、石1）で、うち207点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた（住居外側の遺物も含む）。

1～5・17・26・27・29は南関東系。これらは、27を除いて壺である。1は口縁～頸部。複合口縁で、羽状縄文を施文し、口縁下端にキザミを施す。頸部はヘラミガキ後赤彩（痕跡的）。2は肩部片。羽状縄文を施文後、下端を結節縄文で画し、文様帯を形成する。無文部分はヘラミガキ後、赤彩。3は大形壺で、肩部～胴中位が残存。羽状縄文を横位に重畳施文後、上下端を2条1組の結節縄文で画し、文様帯を形成する。無文部分はヘラミガキ後、赤彩を施す。本例は胎土に石英・雲母細粒がやや目立ち、他と異質なものがある。4は胴上部～胴下半が残存（ピース同士は接合しない）。ヘラケズリ後ヘラミガキを施し、この後赤彩。5は胴部が残存。器内外面とも荒れており、調整痕は不明瞭（外面に赤彩の痕跡）。17は横位の結節縄文の上下に羽状縄文を施文する。本例は胎土に雲母粒子が目立つ。26は口縁～頸部片。幅状の複合口縁で、羽状縄文を施文後、下端にキザミを施す。頸部及び内面全体に赤彩が施される。

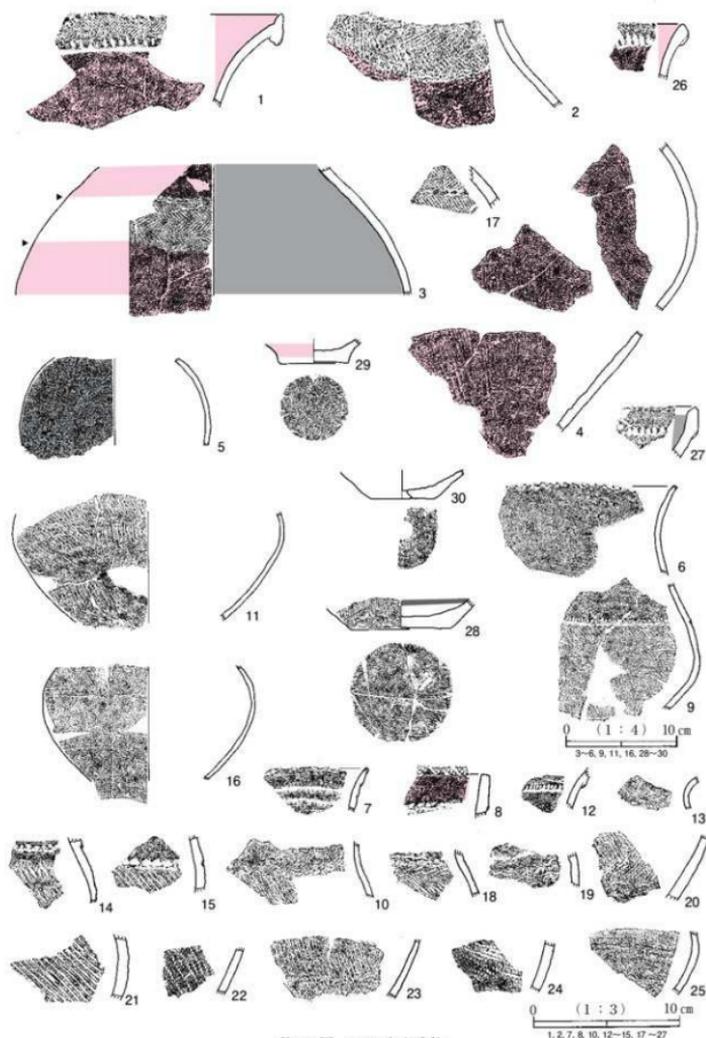
27は壺または高坏か。複合口縁で、縄文を施文後、下端にキザミを施す。29は底部付近。外面赤彩。

6～25・28は甕で、属性的には多様な内容である。6・9は同一個体で、有段甕。口唇をひだ状にし、頸部は無文。段上にキザミを施し、胴部は附加条縄文を施文する。14・15も有段甕で、各々キザミの施文具が異なる。7は口唇をひだ状にし、口辺は輪積み痕をそのままに残す。8は複合口縁で、口唇上



第19図 O7D実測図

第2章 平沢遺跡a地点の調査

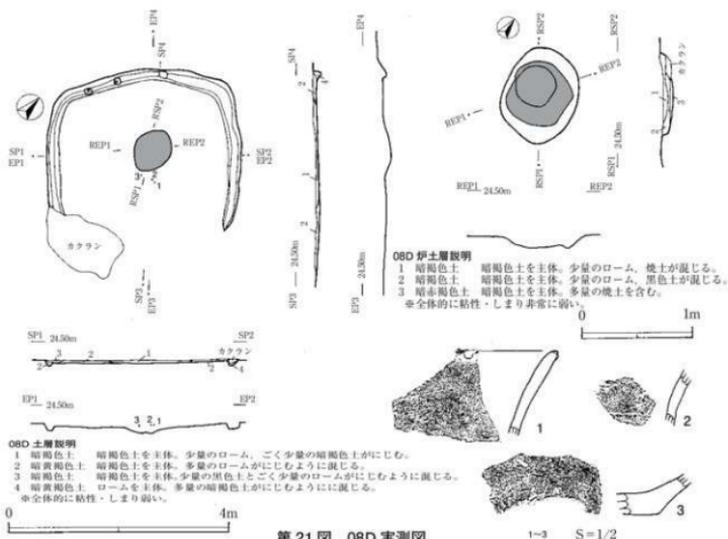


第20図 07D 出土遺物

に縄文施文。口縁部は無文となる。10は頸部無文帯と胴部の境を結節縄文で画し、胴部は附加条縄文を施文。18・19も胴部との境に結節縄文を施す。11・16は壺になるか。地文として附加条縄文を施文。12は口辺部片で、複合口縁の下端にキザミを施す。20～24は附加条縄文を施した胴部片。25は調整痕のみ。30は甕または壺の底部で、中央に外面側から焼成後穿孔が認められる。甕ならば甕に転用か。O8D(第21図)

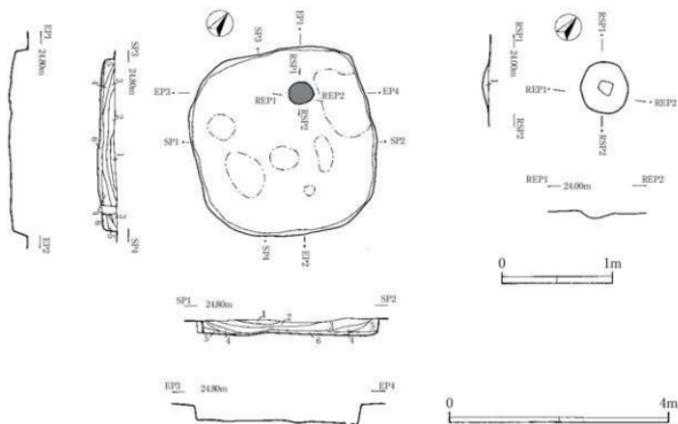
位置 K3・L3グリッドにまたがる。重複関係 単独。主軸方位 N-52°-W。平面形 本来的には隅丸方形を呈するか。規模 (3.12m) × 3.55m。遺構確認面からの深さ0.10m。壁 残存が比較的良好な部分では、ほぼ垂直に立ち上がる。床 ソフトロームまで掘り込んで床とする。全体的に踏みまわっているが、明瞭な硬化範囲は見られなかった。周溝 残存部分では全周する(南壁側は削平などで消失)。北壁下では周溝内柱穴2本を検出した。炉 ほぼ中軸上、北壁寄りに設ける。地床形で、皿状に掘り込まれており、炉底は良く焼けている。貯蔵穴 検出されなかった。ピット 検出されなかった。覆土 4層に分層できた。本来の覆土。即ち本跡を埋めていた土層の、下層しか残存していないので、多くは語れないが、自然埋没(自然堆積)と考えられる。遺物出土状態 炉のすぐ南側に、土器片が少量廃棄されている。出土層位は1層になるが、かなり床面のレベルに近いものである。廃絶後に上屋などを解体してから、比較的時間が経過しない内に廃棄したものと思われる。おそらしくは、若干のくぼ地になっていて、中央部分はほとんど土砂が堆積していない状態だったのであろう。建て替え 認められなかった。備考 本跡は、今回検出遺構の中でもとりわけ浅く、削平などの影響を考慮したいが、遺跡全体が後世の地形改変をあまり受けていないため、他の要因も併せて考慮して行きたい。

本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは、以下のように想定される。



第21図 O8D実測図

第2章 平沢遺跡a地点の調査

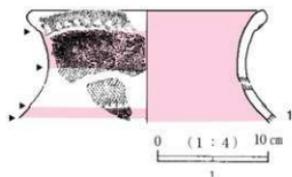
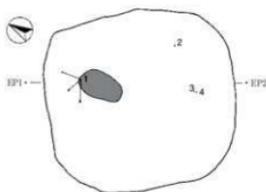


O9D土層説明

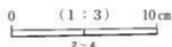
- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体、ごく少量の黒色土がにじむ。粘性・しまり非常に弱い。
- 2 黒褐色土 黒色土を主体、少量の暗褐色土にじむように混じる。粘性・しまり普通。
- 3 暗褐色土 暗褐色土を主体、少量の黒色土とロームがにじむように混じる。粘性・しまり普通。
- 4 暗褐色土 暗褐色土を主体、多量のロームと少量の黒色土がにじむように混じる。

- 5 暗黄褐色土 ロームを主体、多量のロームと少量の暗褐色土がにじむように混じる。
- 6 暗黄褐色土 ロームを主体、少量の暗褐色土がにじむように混じる。少量の焼土含む。

※ 4層、5層、6層の粘性強い、しまり普通。



床面・5層・4層



第22図 O9D実測図

①廃絶後の上屋の解体→②自然埋没(2層～4層)→③廃品の廃棄行為(1層下部)→④自然埋没(1層)  
**出土遺物** (第21図)

出土総数は3点(弥生土器)で、その全てをドット・マップ(遺物分布図)化して取り上げた。

1～3は甕。1は口辺部片で、口唇をひだ状にし、頸部無文帯を形成する。2は胴部片で、地文をもたず、器面調整痕のみ。3は胴下半～底部片で、器面調整痕のみである。

**O9D** (第22図)

**位置** Q3・Q4・R3・R4グリッドにまたがる。**重複関係** 単独。**主軸方位** N-52°-W。**平面形** 兩丸方形を呈する。**規模** 3.45m×3.40m。遺構確認面からの深さ0.35m。**壁** ほぼ垂直に立ち上がる。**床** ソフトロームまで掘り込んで床とする。炉の東脇、床面中央から西壁にかけて、数箇所の「鳥状硬化面」が認められた。**周溝** 廻らせていない。**炉** 中軸線よりは東寄りの、北壁近くに設ける。地床炉で、皿状に掘り込まれており、炉底は焼けている。**貯蔵穴** 検出されなかった。**ピット** 検出されなかった。**覆土** 6層に分層できた。6層は廃屋後に上屋を解体し、廃材の焼却処理してから、消火活動を行った際に投げ込まれたもの。これに対して、1層～5層は自然堆積である。**遺物出土状態** 第22図1は4層・5層・6層出土の破片が接合した。これに対し、同図2～4は2層出土である。これらの事象を、「廃棄」によるものか、「流入」によるものか、現状では判断が難しい。ただ、6層の事例は「廃棄」の可能性が高く、2層の事例は「流入」と解釈するのが妥当と考える。**建て替え** 認められなかった。**備考** 本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは、以下のように想定される。

- ①廃絶後の上屋の解体→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄・廃品の廃棄(6層)→  
 ④自然埋没の開始と、廃品の廃棄ないしは流入(2層～5層)→⑤完全埋没へ(1層)

**出土遺物** (第22図)

出土総数は13点(弥生土器11、縄文土器2)で、うち11点をドット・マップ(遺物分布図)化して取り上げた。

1～3は南関東系。1は広口壺。複合口縁で、頸部と胴部の境に段を有する。無文部及び内面は赤彩。2は甕ないし甕の胴部片。3は甕の底部付近。4は地文として附加条縄文を施した胴部片で、在地系。

## 第4節 土坑及び溝跡

土坑1基と、溝跡1条が調査されている。いずれも、時期決定の要素は乏しかった。

**1. 土坑** (第23図)

**O1P** (第23図)

**位置** H2グリッドで検出された。**重複関係** O4BDに切られる。**長軸** 不明。**平面形** 方形を基調とする(詳細不明)。**壁・底面** 壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや丸みを帯び、凹凸が少ない。**規模** (0.91m)×(0.29m)、検出面からの深さは0.48mを測る。**覆土** 2層に分層できた。黒色土上で、ともに粘性、しまりが弱い。**出土遺物** 出土しなかった。

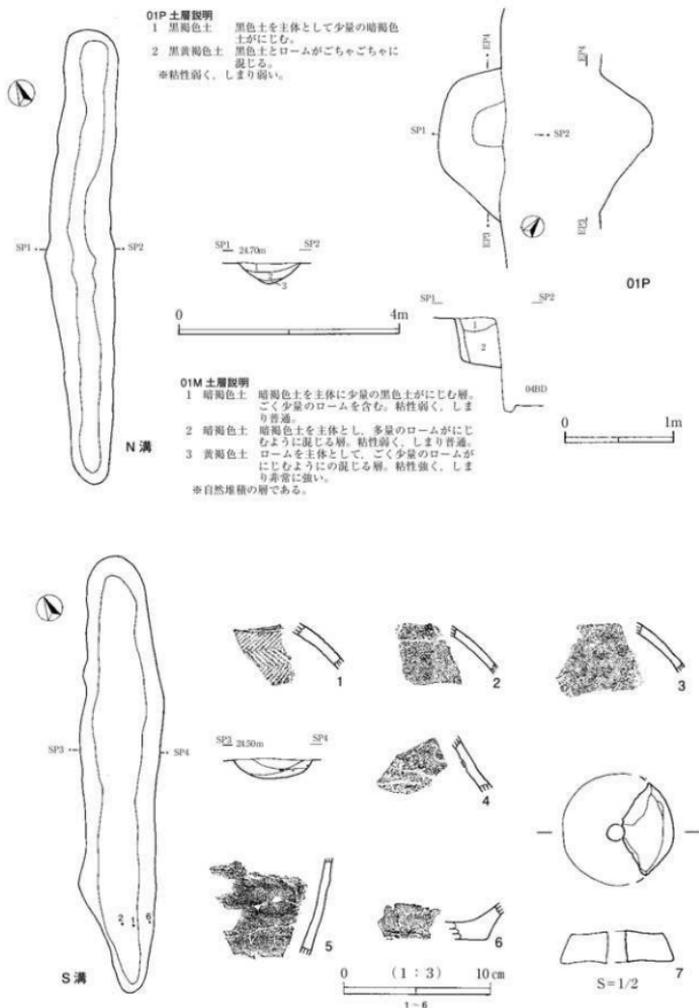
**2. 溝跡** (第23図)

**O1M** (第23図)

本跡は二つの独立した小溝からなるため、各々をN溝(北側)・S溝(南側)として記述する。

**N溝** **位置** D2・E2グリッドにまたがる。**重複関係** 単独。**長軸** N-12°-E。**平面形** 略直線状を呈する。**壁・底面** 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び、若干の凹凸を有する。**規模** 8.42m×1.28m、検出面からの深さは0.41mを測る。**覆土** 3層に分層できた。全て自然埋没である。**出土遺物** 出土総数は8点(弥生土器5、土製品1、縄文土器2)で、うち6点をドット・マップ(遺物分布図)

第2章 平沢遺跡a地点の調査



第23図 01P-01M実測図

化して取り上げた。土製品は土製紡錘車である。

**S溝** 位置 F1・F2・G1グリッドにまたがる。重複関係 単独、長軸 N-11°-E。平面形 略直線状を呈する。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び、若干の凹凸を有する。N溝と比較して、底面がかなり幅広く掘られている。規模 8.42m × 1.28m。検出面からの深さは0.41mを測る。覆土 3層に分層できた。全て自然埋没である。出土遺物 出土しなかった。

**備考** N溝とS溝との間には、1.41mの間隔がある。本溝跡は、その位置から見てb地点02M溝状遺構に繋がるものと考えられる。

弥生土器観察表 (1)

図D (第7図)		(単位: cm)							
図面番号	図種	口径	底径	器高	裏面	胎土	色調	手法上の特徴	
1	壺	最大径 [14.8]	[22.2]	[24.6]	口縁- 胴下半	細砂、長石、赤色スコリア を含む。	外面赤褐色 内面褐色	複合口縁、胴部-胴部は須賀焼文を施し上下端を刷目状赤褐色で飾る。 外面は赤彩あり。内面はヘラナデ。	
2	広口壺				口縁- 胴部	細砂、スコリア凝結を含む。 黒色粒子やや目立つ。	外面灰褐色 内面灰褐色	複合口縁。口縁上に縄文を施し、土曜にキズミを施す。内面はヘラナデの。 本例は、高坪の胴部の可能性がある。	
3	壺				口縁- 胴部	細砂、スコリア凝結を含む。 黒色粒子やや目立つ。	外面灰褐色 内面灰褐色	複合口縁。口縁部に縄文を施す。下腹にキズミを施す。 内面はヘラナデ後、赤彩を施す。	
4	壺				口縁- 胴部	細砂、スコリア凝結を含む。 黒色粒子やや目立つ。	内外面ともに 褐色	複合口縁。口縁部に縄文を施す。下腹にキズミを施す。 ヘラナデ後、ヘラミゼキ。最終的に赤彩。	
5	壺				胴部片	砂、長石、スコリア凝結。 黒色粒子を含む。	外面赤褐色 内面灰褐色	外面の調整はヘラミゼキを施し、地肌露に赤彩。 内面はヘラナデ。	
6	壺		[9.1]	[2.8]	底部	細砂、長石、スコリア凝結。 黒色粒子を含む。	外面赤褐色 内面灰褐色	外面の調整はヘラミゼキを施し、地肌露に赤彩。 内面の調整はヘラナデを施す。地肌露に赤彩あり。	
7	壺				口縁- 底部	細砂、長石、スコリア粉 を含む。	外面灰褐色 内面赤褐色	複合口縁で、口縁はひだり。口縁と胴部は結晶縄文で区画し、附加赤縄文 を施す。胴部無文字帯を構成。底部に地成穿孔。内面はヘラナデ。	
8	壺	[17.5]	[6.2]	[20.2]	口縁- 胴部	細砂、長石、スコリア粉 を含む。	外面灰褐色 内面赤褐色	複合口縁で、口縁の下腹にキズミを施す。口縁部と胴部には附加赤縄文を 施す。内面はヘラナデ後、ヘラナデ。経路が見られる。	
9	壺	最大径 [22.4]	[22.9]	[20.4]	胴上半	細砂目立ち、長石、スコ リア凝結を含む。	内外面ともに 褐色	複合口縁で、口縁はひだり。口縁部と胴部には附加赤縄文を施す。胴部 には結晶縄文を差す。胴部との間に段を有す。内面は丁寧なヘラナデ。	
10	埴				口縁部 と胴部	細砂、長石、スコリア粉 を含む。	内外面ともに 赤褐色	複合口縁。口縁部は刷目状赤褐色を施す。外面は赤彩を施し、地成露 穿孔を有する。内面の調整はヘラナデで、赤彩を施す。	
11	小形 壺か				口縁部	細砂、長石、スコリア 凝結を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	口縁上にキズミ、沈殿で飾り、口縁部側面を光輝。さらにキズミ列を施 らし、数層の円形刷目文を垂下する。内面はヘラナデ。	
12	壺小				胴部片	細砂、長石、石灰。 黒色凝結を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	外面は円形刷目文を施し、斜位の刷目文を施す。 内面はやや丸んでいる。	
13	壺				口縁部 と胴部	細砂目立ち、長石、スコ リア凝結を含む。	内外面ともに 褐色	外面は手織竹管などをを用いて、2条1組の沈殿を施す。 内面はヘラナデ。	
14	壺				胴部片	砂、長石、石灰。 スコリア粉を含む。	外面淡褐色 内面褐色	外面は沈殿による区画内に格子目文を光輝する。 内面は調整が荒れている。調整は不明。	
15	壺				胴部片	砂、長石、石灰。 スコリア粉を含む。	外面淡褐色 内面褐色	外面は沈殿による区画内に格子目文を光輝する。 内面は調整が荒れている。調整は不明。口と同一個体。	
16	壺				胴部片	砂、長石、石灰。 スコリア粉を含む。	外面淡褐色 内面褐色	外面は沈殿による区画内に格子目文を光輝する。 内面は調整が荒れている。調整は不明。口と同一個体。	
図D (第9図)		(単位: cm)							
図面番号	図種	口径	底径	器高	裏面	胎土	色調	手法上の特徴	
1	ひさこ 形壺	径 [8.6]	[4.8]	[20.5]	口縁- 胴- 胴部	細砂、長石、スコリア凝 結を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	外面の口縁はナデ。胴部-胴部はヘラナデ後、ヘラミゼキ。 外面の口縁はナデ。胴部-胴部はヘラナデ。本例は土加型。	
2	壺	[径小]			胴部小 胴部	細砂目立ち、長石、 スコリア凝結を含む。	外面灰褐色 内面灰褐色	外面には刷目状赤褐色を施す。 内面はヘラナデ。本例は鉢型土器に似ている。	
3	壺				胴下半	細砂目立ち、長石、 スコリア凝結を含む。	外面赤褐色 内面灰褐色	外面の最終調整はヘラミゼキ。後に赤彩を施す。 内面はヘラナデ。	
4	壺				胴部片	細砂、長石、スコリア粉 を含む。	内外面ともに 褐色	外面の最終調整はナデ。 内面の最終調整はナデ。	
5	壺				胴下半	砂、長石、スコリア凝結。 黒色粒子を含む。	内外面ともに 褐色	地文として縄文2段状(前々段条)を施す。 内面の最終調整はヘラナデ。	
6	壺				胴下半	5とほぼ同様。	外面赤褐色 内面灰褐色	5とほぼ同様。	
7	壺				胴下半	5とほぼ同様。	外面赤褐色 内面灰褐色	5とほぼ同様。	
8	壺				胴下半	細砂、長石、スコリア粉 を含む。	外面灰褐色 内面淡褐色	地文として附加赤縄文を施す。 内面の最終調整はヘラナデ。	



第4節 土境及び溝跡

弥生土器観察表(3)

01 D (番 14回)		(単位: cm)						
期間番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	壺	加部段 12.2		(9.6)	口縁一 部部 黒色粒子細粒を含む。	内外面ともに 濃褐色		縄文を施文後、粘着縄文で土器を閉す。無文部はヘラツズリ後ヘラミダキ、のち赤彩(塗彩)。内面は滑磨して調整は不明。
2	甕 (肉盤)	(15.9)	胴下平	(8.2) (3.1)	口縁一 部部 黒、長石、赤色スコリア 細粒を含む。	内外面ともに 濃褐色		口縁一部は輪組み筋をそのまま残し、軽くヘラツズリ。胴部との境は段を有し、胴部はヘラツズリ。内面の口縁はナゲ。胴部はヘラツズリ。
3	甕	(9.5)		(9.6)	口縁一 部部 黒、長石、スコリア 粒を含む。	外面赤褐色 内面黒褐色		口縁部は輪組み筋をそのまま残す。底部は無文帯の下縁を縄文で直し、胴部はヘラツズリ後、ヘラツズリ。内面はヘラツズリ後、ヘラツズリ。内面は滑磨の痕跡らしきが見られる。
4	甕	16.6		(16.1)	口縁一 部部 黒、長石、スコリア 細粒を含む。黒密。	内外面ともに 濃褐色		腹合口縁で、口縁下部にキダシを施す。口縁部に縄文を施文。胴部は追加赤縄文を施文する。内面はヘラツズリ後でいまいなヘラツズリ。
5	甕	16.6	(7.1)	(24.0)	胴中一 部部 砂、長石、石英、雲母 粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		胴部に狭小な無文帯を有し、口蓋と胴部に追加赤縄文を施文。口蓋部に縦位2列の刺突を施し、それをまたぐ形で縦位の輪筋を付す。内面はヘラツズリ。
6	甕				口縁片 部部 黒、長石、スコリア。 黒色粒子細粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		腹合口縁で、口縁下部にキダシを施す。口縁部に縄文を施文。 内面の最終調整はヘラミダキ、のち赤彩。
7	甕				胴部片 部部 黒、長石、スコリア。 黒色粒子細粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		沈磨で山形文を磨き、滑磨縄文とする。無文部には赤彩を施す。 内面の最終調整はヘラツズリ。
8	甕				胴部片 部部 黒、長石、赤色スコリア 黒色粒子の細粒を含む。	内外面ともに 濃褐色		ほぼ7と同様。 ※外面の赤彩は痕跡的である。
9	甕				胴部片 部部 ほぼ7と同様。	外面赤褐色 内面赤褐色		ほぼ7と同様。
10	甕				胴部片 部部 ほぼ7と同様。	内外面ともに 赤褐色		外面の最終調整はヘラミダキ、のち赤彩。 内面の調整の痕は、外面と同様。
11	甕				胴部片 部部 黒粒を含む。黒色粒子 細粒やキダシ。	外面赤褐色 内面赤褐色		外面の最終調整はヘラミダキ、のち赤彩。 内面はヘラツズリのちヘラツズリ。
12	甕				胴部片 部部 ほぼ11と同様。	ほぼ11と同様		ほぼ11と同様。 11と同様僅少。
13	高坪 盆	口縁部 片部			黒、長石、赤色スコ リア細粒を含む。	内外面ともに 赤褐色		口蓋上に縦目状赤縄文を施文する。それより下部はヘラミダキ、のち赤彩。 内面の最終調整はヘラミダキ、のち赤彩(内外面ともスコリア粉を赤彩)。
14	甕	胴部全 部部			黒、長石、スコリア。 黒色粒子の細粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		施文域には無筋縄文を施文する。他はヘラミダキ、のち赤彩。 内面の最終調整はヘラツズリ。
15	甕	胴部片 部部			黒、長石、スコリア 細粒を含む。	内外面ともに 赤褐色		輪組み筋をそのまま残す。軽くナゲ調整を施している。 内面の最終調整はナゲ。
16	甕	胴部片 部部			黒、長石、スコリア 細粒を含む。	内外面ともに 赤褐色		胴部はナゲ。胴部との境に粘着縄文を2段施文する。 内面の最終調整はヘラツズリ。
17	甕	胴部片 部部			黒、長石、スコリア 細粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		外面は追加赤縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラツズリ。「コダ」が付着している。
18	甕	胴部片 部部			ほぼ17と同様。	ほぼ17と同様		ほぼ17と同様。 17と同様僅少。
19	甕	胴下平 一部部			黒、長石、赤色スコ リア細粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色		胴下平は追加赤縄文を施文。底部外面はヘラツズリ。 内面はヘラツズリ後、ヘラツズリ。
20	甕	胴部 部部			黒、長石、スコリア 細粒を含む。	内外面ともに 赤褐色		外面はヘラツズリ後、ヘラミダキ。本例は1層筋か。



## 第4節 土坑及び溝跡

弥生土器遺物観察表(5)

図D-1(表20)例	図例	口径	底径	高さ	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	甕	口縁部			口縁部	胎石、長石、スコリア、黒色粘土顆粒を含む。	外面黒褐色 内面赤褐色	復合口縁で、口縁下部にキザミを施す。胎部は縦方向のヘラミギキ、赤彩の遺跡あり。内面はヘラミギキ、のち赤彩。
2	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア、黒色粘土顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	胎部は附加赤褐色を施す。下部を黒褐色で覆す。口縁部はヘラミギキ、のち赤彩を施す。内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。内外面とも薄減が立つ。
3	甕	最大径 (35.8)		胎中位 (11.9)	胎中位	胎石、長石、スコリア、黒色粘土顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	口縁部は附加赤褐色を施す。上下高を互差の粘着縄文で覆す。胎部と胎部はヘラミギキ、のち赤彩。内面は胎部の調整が整い、赤彩あり。
4	甕	胎中位			胎中位	胎石、長石、赤色スコリア顆粒、黒色粘土を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	外面の最終調整はヘラミギキ。 内面の最終調整はヘラミギキ。
5	甕	最大径 (37.4)		(8.5)	胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	外面の調整は胎部が荒れていて不明。赤彩の遺跡あり。 内面はヘラミギキ。
6	甕	口縁部			口縁部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面黒褐色 内面赤褐色	単口縁で、口唇をひだ状にする。口縁部はナゲ。 内面の最終調整はナゲ。身と同一個体か。
7	甕	口縁部			口縁部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	単口縁で、口唇をひだ状にする。胎部にかけて輪郭み盛をそのままに残す。 内面の最終調整はヘラミギキ。片舟形式土器。
8	甕	口縁部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。黒彩。	外面赤褐色 内面黄褐色	復合口縁で、口縁の下部に斜交列を施す。口唇上にも縄文を施す。外面に赤彩を施す。内面の最終調整はナゲ。
9	甕 (片蓋)	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	胎部は無文とし、胎部との境に段状にキザミを施す。胎部と胎部を含む。この部分から胎部赤褐色を施す。内面はヘラミギキ。身と同一個体か。
10	甕	胎部			胎部	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部は無文とし、下部を黒褐色で覆す。胎部は附加赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ。赤彩あり。
11	甕	最大径 (24.6)		(10.8)	胎中位 下平	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部赤褐色を施す。部分的にヘラミギキを行う。 内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。
12	甕	口縁部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	復合口縁で、口縁下部にキザミを施す。胎部は無文とする。 内面の最終調整はナゲ。
13	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 淡褐色	外面は附加赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ。
14	甕 (片蓋)	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	胎部との境に段を含む。口唇斜交を施す。胎部は附加赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ(単なるナゲナゲ)。
15	甕	胎部			胎部	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	胎部は無文とし、胎部との境に斜交列を施す。胎部は附加赤褐色を施す。 内面の最終調整はナゲ。
16	甕	胎中位 下平			胎中位 下平	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	外面黒褐色 内面黄褐色	胎部赤褐色を施す。スギが付着する。 内面はヘラミギキ後、ナゲ。
17	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア、雲母顆粒を含む。	内外面ともに 淡褐色	附加赤褐色を施す。縦糸の粘着縄文で覆す。 内面の最終調整はヘラミギキ。曲底甕。
18	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部との境に胎部の粘着縄文を施す。胎部は附加赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ。
19	甕	胎部			胎部	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 黄褐色	胎部の粘着縄文を施す。 内面の最終調整はナゲ。
20	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部赤褐色を施す。 内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。
21	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	胎部赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ(ナゲ)か。
22	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部赤褐色を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ。
23	甕	胎部			胎部	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黄褐色	胎部赤褐色を施す。 内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。
24	甕	胎部			胎部	胎石、長石、石炭、スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 淡褐色	胎部赤褐色を施す。 内面の最終調整はナゲ。
25	甕	胎部			胎部	胎石、長石、ヘラミギキ顆粒を含む。	外面黒褐色 内面黄褐色	胎部はヘラミギキのちヘラミギキ。 内面の最終調整はナゲ(「スピナゲ」)。
26	広口甕	口縁部			口縁部	胎石、長石、スコリア、黒色粘土顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	復合口縁で、口縁下部にキザミを施す。口縁部は縄文を施す。胎部はヘラミギキのち赤彩。内面の最終調整はヘラミギキ、のち赤彩。曲底甕。
27	浅小甕	口縁部			胎部	胎石、石英、雲母、黒色粘土顆粒を含む。	内外面ともに 淡褐色	復合口縁で、口縁下部にキザミを施す。胎部は縄文を施す。 内面の最終調整はヘラミギキ、のち赤彩(遺跡)。曲底甕。
28	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	胎部は附加赤褐色を施す。 内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。
29	甕	胎部			胎部	胎石、長石、スコリア顆粒を含む。	外面赤褐色 内面黒褐色	胎部はヘラミギキ、のち赤彩。胎部はヘラミギキ。 内面はヘラミギキ後、ヘラミギキ。本例は曲底甕系になるか。
30	甕 (片蓋)	胎部			胎部	胎石、長石、赤色スコリア顆粒を含む。	内外面ともに 赤褐色	胎部はヘラミギキ後、ヘラミギキ。胎部中央に縦糸粘着縄文あり。 内面は胎部が荒れていて調整不明。本例は「私用瓶」になるか。

## 第2章 平沢遺跡 a 地点の調査

弥生土器観察表 (6)

09 D (第21回)		(単位:cm)			胎土	色 調	手 法 上 の 特 徴
標本番号	器種	口径	口径	器高			
1	甕		口縁部	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	外面黒褐色 内面淡褐色	外面はごく目の細かヘラナゲ調整。ススが付着する。 内面はヘラナゲリ後、ナデ。
2	甕		胎土	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	外面暗褐色 内面淡褐色	外面の最終調整はナデ。 内面の最終調整はナデ。
3	甕		胴下半 ～底部	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	外面暗褐色 内面淡褐色	胴下半はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。底部はヘラ調整。 内面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。
09 D (第22回)		(単位:cm)			胎土	色 調	手 法 上 の 特 徴
標本番号	器種	口径	口径	器高			
1	広口甕		口縁部	胎土	細砂、長石、赤色スコリア 繊維を含む。	外面暗赤褐色 内面暗褐色	複合口縁で、口縁下部に指調印痕を施す。胎土無文帯に赤彩。胴部この 境は段を有し、羽状縄文施文。胴部は赤彩。内面はヘラミガキ。のち赤彩。
2	甕		胎土	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	外面暗褐色 内面暗褐色	外面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。 内面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。
3	甕		胴下半 ～底部	胎土	細砂、長石、赤色スコリア 繊維を含む。	外面暗褐色 内面黒褐色	外面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。 内面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。
4	甕		胎土	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	内外面ともに 赤褐色	帯加赤縄文を施文する。 内面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。
09 E (第23回)		(単位:cm)			胎土	色 調	手 法 上 の 特 徴
標本番号	器種	口径	口径	器高			
1	甕		胎土	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維を含む。	外面赤褐色 内面淡褐色	羽状縄文の施文域は外はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナゲ。
2	甕		胎土	胎土	細砂、長石、石灰、スコリア 繊維を含む。	外面暗褐色 内面赤褐色	細かな羽状縄文を帯加施文する。 内面の最終調整はヘラナゲ。
3	甕		胎土	胎土	2と同様。	2と同様。	2と同様。 2と同様。
4	甕		胎土	胎土	細砂、長石、赤色スコリア 繊維を含む。	内外面ともに 赤褐色	外面は帯加赤縄文をやや疎らに施文する。 内面はヘラナゲリ後ヘラナゲ。
5	甕		胎土	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維含む。塵土。	内外面ともに 暗赤褐色	ヘラナゲリ後、部分的にヘラミガキ。 内面はヘラナゲリ後ヘラナゲ。
6	甕		胴下半 ～底部	胎土	細砂、長石、スコリア 繊維含む。	外面赤褐色 内面黒褐色	胴下半はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。のち赤彩。底部は本帯痕あり。 内面はヘラナゲリ後、ヘラナゲ。

## 第3章 殿台遺跡 a 地点の調査

### 第1節 調査の概要

都市計画道路3・4・9号線は、平沢・殿台地区を北西-南東の方向に縦断する形で設定されている。そのため、本遺跡の西側部分を道路が分断することになる。

調査は道路幅で、さらに部分拡張という、極めて限定されたものであったが、旧石器時代の遺物集中箇所2地点、時期不明の土坑2基（うち1基は井戸状のもの）が検出された。遺物は旧石器、縄文土器、奈良時代須恵器、江戸時代在地系土器が出土した。

### 第2節 旧石器時代

下層調査の結果、遺物集中箇所が2地点検出された。

#### 1. 遺物集中箇所

##### 集中箇所1（第25図）

K1-12・K2-9グリッドにまたがる。台地上平坦面からやや斜面にかかる付近である。

産出層準は立川ローム層Ⅲ層下部～Ⅳ層上部に相当する。

石器類は長径3.8m、短径2.0mの範囲に分布する。平面分布的には散漫で、垂直分布的にはややばらつきが認められる。

第25図の土層断面図は西壁で作成したものである。

遺物は石器類6点が出土した。このうち3点を図化した。

##### 出土遺物（第25図）

1・3は使用痕のある剥片。1は片側の側縁を中心に、使用による「刃こぼれ」が見られる。3は原礫面を一部残す。片側の側縁に使用による「刃こぼれ」が見られる。2は剥片（打面調整剥片）か。背面は剥離面のままで、表側には剥片の剥離面が数箇所認められる。石材は1・3がチャート、2は珪質頁岩。

##### 集中箇所2（第25図）

K2-10・11グリッドにまたがる。台地上平坦面からやや斜面にかかる付近である。

産出層準は立川ローム層Ⅲ層下部～Ⅳ層上部に相当する。

石器類は長径1.85m、短径1.2mの範囲に分布する。平面分布的には散漫で、垂直分布的にはややばらつきが認められる。第25図の土層断面図は西壁で作成したものである。

遺物は石器類3点が出土した。このうち1点を図化した。

##### 出土遺物（第25図）

4は剥片。背面に一次剥離面が見られる。石材はチャートか。

5のみ遺構外出土石器で、使用痕のある剥片。石材はチャートか。

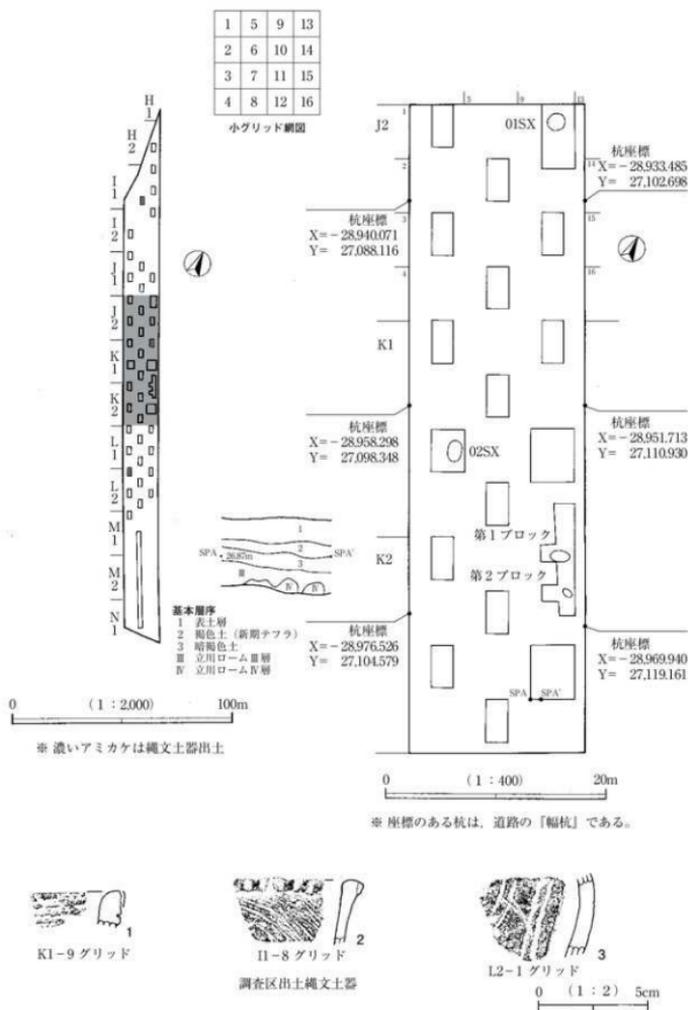
### 第3節 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文土器3点が出土している。

#### 1. 縄文土器（第24図）

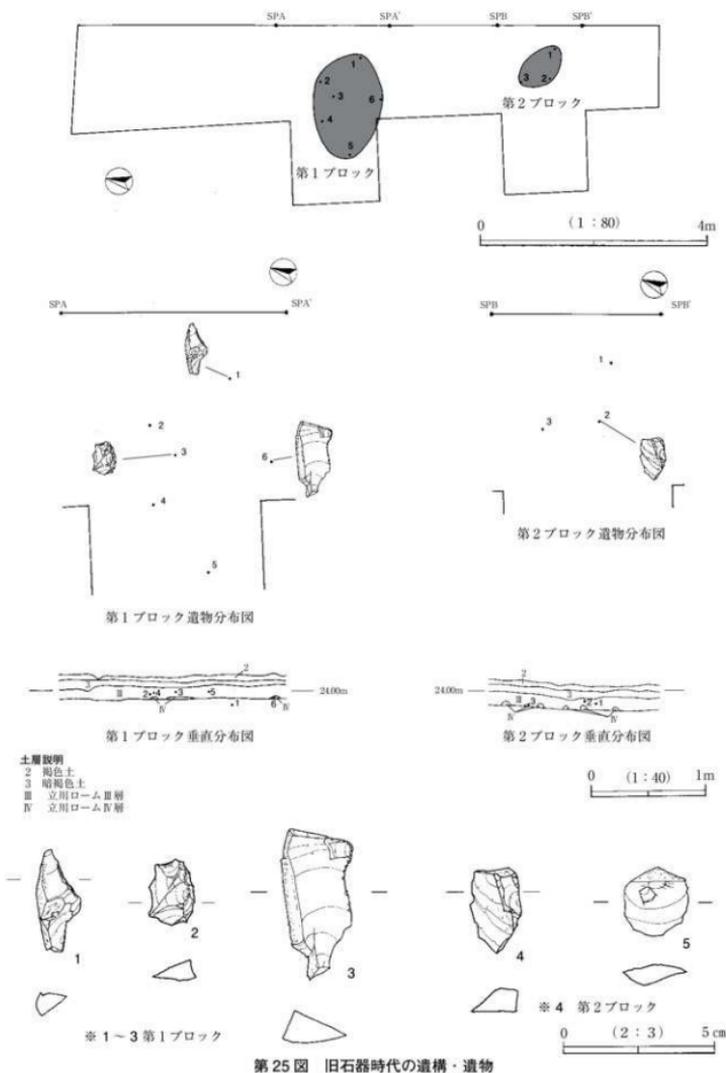
1は横位の平行沈線を重畳施文した口縁片で、加曽利B式土器か。2は右下がりの条線を地文とし、口縁部に紐線を貼付、この後連続圧痕を施した口縁片。加曽利B2式～B3式の紐文系粗製土器である。3は半截竹管などの内側を用いた平行沈線を施文する。堀之内式土器。

第3章 殿台遺跡a地点の調査



第24図 殿台遺跡遺構配置図・出土縄文土器

第3節 縄文時代



第25図 旧石器時代の遺構・遺物

#### 第4節 奈良時代～江戸時代

今回の調査で、遺構に伴うものではないが、奈良時代及び江戸時代に相当する時期の遺物が出土している。また、遺物を伴わない土坑2基が検出されているので、ここに報告したい。

##### 1. 調査区出土遺物 (第26図)

1は須恵器で、甕(五孔式)の底部片。胎土に石英・雲母細粒を含み、常陸産(奈良時代)。

2～5は在地系土器で、江戸時代の所産。2・3は土師質であるが、比較的硬く焼き締められている。2は胴下半～底部片。外面に回転台などによる調整が認められ、内面はヘラケズリ後、ヘラナデ。器形的には甕になるか。3は甕の胴部片。最終的な器面調整は、内外面ともヘラナデで、特に内面は丁寧にわれ、ヘラミガキに近い光沢がある。

4は焙烙の口辺部片。外面はロクロないし回転台による調整が認められる。胎土は細砂・長石・赤色スコリア・雲母細粒を含む。表裏とも耕作時の農具による損傷(鎌などの傷跡)がやや目立つ。

5は「かわかけ」の小皿の底部片。ロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切り、切り離し後無調整。見込み面(内面)はロクロなで。内外面とも橙褐色を呈し、器壁は厚さが3～4mmを測り、薄手に仕上げている。胎土は細砂・長石・スコリア微細粒を含み、緻密である。

##### 2. 土坑

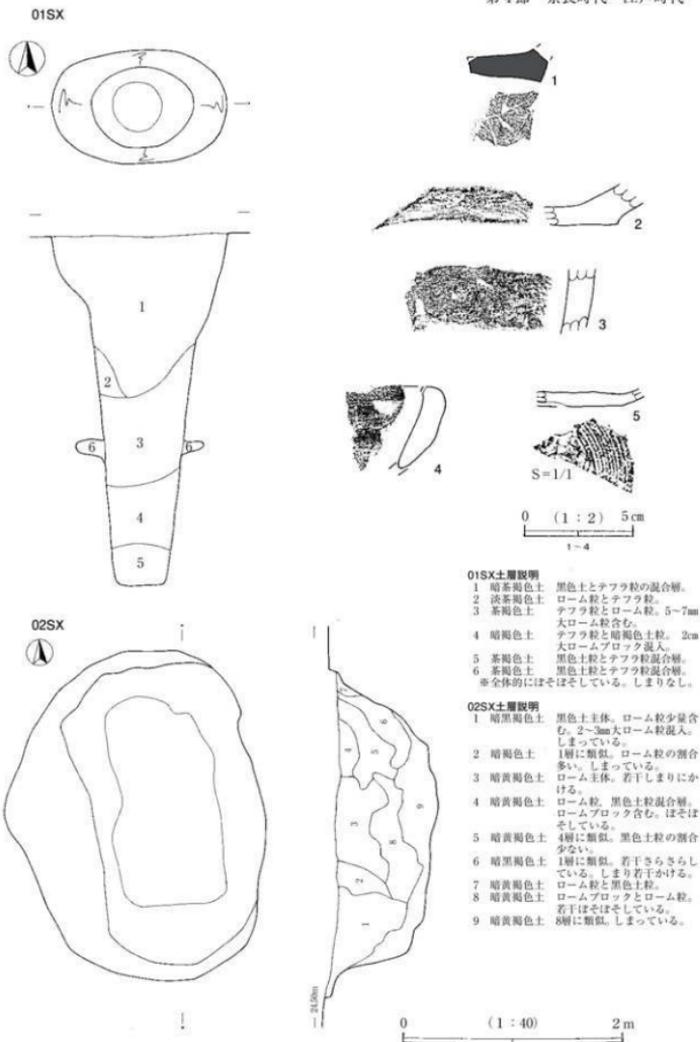
###### 01SX (第26図)

位置 J2-9グリッドで検出された。重複関係 単独。長軸 N-88°-W。平面形 上部は楕円形、中段以下は円形を呈する。壁・底面 壁の中段から上はややゆるやかに立ち上がり、下は垂直気味に掘り込まれる。深さ約1.95m前後の壁面に、「足場状の小穴」が掘られている。底面の壁際はやや丸みを帯びるが、全体的に比較的平坦である。規模 1.61m × 1.12m。底部の径が0.45m。検出面からの深さは、最深部で3.45mを測る。覆土 6層に分層できた。全体にボソボソで、しまりに欠ける。出土遺物 出土しなかった。備考 本跡は、形状的に見ていわゆる「井戸状遺構」である。ただし、掘り下げ中に水が湧き出すことはなく、土層観察の結果では、かつて水を湛えていた形跡は認められなかった。従って、現状で「井戸」であると認定するには、困難な要素がある。とはいえ、これだけの規模、深度を有するという点の特筆すべきもので、かつ「井戸」に代わるべき機能もまた、現状では見当たらない。

なお、本跡は中段までは手掘りで半裁したが、この後ピンボールを使用して深度と壁面の状態を探索したところ、全く底面に達しないばかりか、壁面はほぼ垂直に下がって行く状況が確認された。調査期間の都合上、中段より下部は重機を用いて半裁し、大急ぎで断面図作成と断面写真を撮影した。結局、深度が3mを越えていること、かつ幅が0.5m前後しかないということも合わせ、安全面を最重視して、完掘を断念するに至った。

###### 02SX (第26図)

位置 K1-3・K1-7グリッドにまたがる。重複関係 単独。長軸 N-8°-W。平面形 上部、底部とも不整な隅丸長方形を呈する。壁・底面 南壁を除いて、比較的垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸に富む。規模 3.12m × 2.25m。検出面からの深さは0.98mを測る。覆土 9層に分層できた。暗黄褐色土を主体とする、埋め戻し土である。出土遺物 出土しなかった。



第26図 01SX・02SX 実測図及び調査区出土遺物

## 第4章 成果と課題

### 第1節 平沢遺跡 a地点

#### 1. 縄文時代の様相

##### 縄文土器について

確認調査の遺物を含めると、早期中葉～後期前葉までの間の資料が、総計54点抽出できた。

その内訳は、田戸下層式2点・条痕文系土器3点・黒浜式7点・前期末葉縄文系粗製土器1点・阿玉台Ⅲ式1点・加曾利EⅠ式14点（同一個体を除くと7点）・称名寺Ⅰ式15点・堀之内Ⅰ式9点・不明2点である。

ここで、数量的にややまとまりがある称名寺式土器に関して、少し触れてみたい。

口縁部を有する資料のうち、第4図13はJ字文が横位に連携する属性から、Ib式（旧7段階区分の第3段階）に比定<sup>1)</sup>できる。同図14・15は、J字文の横位連携帯が消失したもので、Ic式（旧7段階区分の第4段階）に比定できよう。胴部片は16がIb式で、17～19はIc式に比定したい。近隣では、本遺跡と西谷津を挟んで対峙する阿蘇中学校東側遺跡でも、Ib式を含む資料が出土している。

今回の一番の成果は、「縄文時代の遺跡としての平沢遺跡を提示できた」ことである。

#### 2. 弥生時代の様相

##### 弥生土器について

今回はごく大雑把に、「南関東系」・「在地系」・「複合口縁系」・「東関東系」・「その他」・「不明（地文縄文の胴部片など）」という、六群に分類した。

##### 「南関東系」

各住居跡から出土しており、安定した存在であった。器種的には装飾壺（サイズは大・中・小あり）を中心に、広口壺・高坏・甕（無台のみ）が見られる。

時期については、大村直氏が用いたところの<sup>2)</sup>、文様帯の区画技法の「帯縄文沈線区画」と「結節区画」という区分原理に従い、前者を「久ヶ原式土器」、後者を「山田橋式土器」とする。今回の資料は、そのほとんどが「結節区画」によるもので、大別としては「山田橋式土器」に比定されるものと考えられよう。従って、時間的な大枠としては、弥生時代後期後半～終末として捉えられる。これを高花宏行氏の編年（以下、高花編年とする）に当てはめると、Ⅲ期～Ⅳ（a・bに細分）期<sup>3)</sup>に相当しよう。

##### 「在地系」

狭義の「白井南式土器 = 素口縁 + 頸部輪積痕 + 頸部下端S字状結節文 + 胴部附加条縄文」に対して、仮にそう呼んでおきたい。今回の資料中、口辺部に限定すると、第14図15（04D）、第16図16（05D）、第20図7（07D）の3点のみであった。このうち、07Dのものは輪積痕の段が明瞭で、04D・05Dのものは輪積痕がナゲ消され気味になっていることから、前者は「白井南式」前半段階、後者が「白井南式」後半段階に比定される。これを高花編年に当てはめると、前者がⅡ期、後者がⅢ期となろう。

##### 「複合口縁系」

複合口縁という属性自体は、北関東（下野地域）の「二軒屋式土器」などに系譜が辿れるものであるが、東関東（常総地域）でも盛行した。今回も各住居跡から出土し、安定した存在の土器群と言える。

非常に雑駁な観察であるが、今回の資料は、第7図9（01D）を除き、いずれも口縁の段が低平化しているもので、頸部下端にS字状結節文を数条施す。低平化した段自体は新しい様相を示すが、S字状結節文（結節縄文）は高花編年のⅡ期に盛行する属性である。ただし、01Dや04Dではより新しい土器と共に出土しており、前代の混入とは見なし難いものがあつた。粟谷遺跡A142では、下大津式土器

と共に頸部下端にS字状結節文を施文した甕が出土している。少ないながらも、こうした事例が確認されているので、高花編年のⅣa期まで、S字状結節文を施す伝統が残存した可能性が高い。と解釈した方が良さそうである。S字状結節文自体は、「東関東系」にも施文された例があり、これを裏づけている。

#### 【東関東系】

05Dから附加条縄文を羽状施文した破片（第16図19）が出土した他、04D及び06Dから、形のわかる甕が計2個体出土した。その属性はいずれも、

「頸部無文帯を挟んで、口辺と胴部に地文として附加条縄文を施文する。この後、口縁下に横位二列の円形竹管による刺突列を施し、それをまたぐ形で縦長の貼瘤（瘤状の突起）を廻らせる。」

というものである。この属性から、「仮称 根鹿北式土器」に位置づけられる。両者の相違点は、06D例のみ胴部に横位の結節文が施されている。そして、胎土には雲母・石英の細粒が目立つ点などから見て、少なくとも、04D例は搬入品である可能性が高い。両者とも、時間的には高花編年のⅣa期に相当しよう。

#### 【その他】

第7図11(01D)の「口唇上にキザミを施し、口縁下に一列の小径円形刺突を廻らし、頸部には2列1組の小径円形刺突を垂下する」ものや、同図14～16の「区内に格子目文を充填した、壺形土器の頸部」などを含む。前者は、一見すると縄文中期初頭の資料に類似するが、胎土・焼成その他から見て、弥生式土器で間違はない。この類例とは言い難いもの、「口唇部に細かなキザミを施し、口辺に小径の円形刺突を施文するもの」であるならば、茨城県稲敷郡美浦村野中遺跡第3号土坑の資料（報告書挿図第11図45）にあり、弥生後期の土器群と共に出土している。いずれにせよ、今後類例の増加が待たれる。

後者は、高花編年のⅠb期のメルクマールとなる属性である。ただ、東関東の霞ヶ浦沿岸では「仮称 根鹿北式土器」の直前まで見られる属性なので、実態は単純ではない。しかも、石英粒子が目立つ胎土は他になく、時間的に後期初頭となると本例のみとなるため、時間的な位置づけには慎重を期したい。それ故、今回は時間の決定を保留したいが、この点は研究者諸賢の御寛恕を乞うものである。

さらに、「南関東系の属性を有しつつ、胎土が在地のもの（第11図17・第18図4）」などは、はじめに記した五群のうち、「南関東系」では扱わず、さりとて「在地系」でも扱わなかった。それが、本群に含めた所以である。これらをかいて捉えるか、それに関しては課題が残ってしまったと言えよう。

#### 【不明】

附加条縄文を地文として施した甕の胴部片は、出土資料のかなりの割合を占める。これは、「在地系」・「複合口縁系」には共通する属性であるため、そのいずれに該当するのか、今回は限定できなかった。

以上をまとめると、今回の資料は、高花編年のⅢ期～Ⅳa期を中心に、一部Ⅱ期を含むと言えよう。

#### 竪穴住居跡の時期と集落

ここでは、前節の内容（弥生土器の検討）を踏まえ、主に「南関東系」を「大村編年」、「東関東系」は「小玉編年」に対比しつつ、「高花編年」の区分に位置づけることで、竪穴住居跡群の時期決定を行う。さらに、そこから最終的には集落のあり方を考えてみたい。

01Dは、第7図1の南関東系装飾壺よりも新期である。1は器面の摩滅・剥落が目立つだけでなく、5層と4b層の両層に廃棄されていたため、01Dの住人が使用していた器ではない。この壺は、帯縄文が多段化（多帯化）しており、頸部がしまった細頸の器形などから見て、「山田橋Ⅰ式」に位置づけられる。そして、住居跡の時期はこれよりも後であるため、「山田橋Ⅱ式期」=高花編年Ⅳa期に相当しよう。

#### 第4章 成果と課題

02Dは、古墳時代前期の時点でいまだ埋没途上であった、としか言えない。詳細な時期は不明である。

03Dは、床面遺棄・廃棄遺物はないが、廃屋に伴う廃材の焼却処理行為後の、消火活動（土砂投棄）直後に土器類の廃棄を集中して行っており、その大半は住人の廃品であった可能性が高い。第11図5の高坏が「山田橋Ⅱ式」に位置づけられるため、住居跡の時期は高花編年Ⅳa期としたい。

04BDは、「仮称 根鹿北式土器」もさることながら、第14図2の甕は輪積痕を残し、最下段に押捺痕を有さない点などから、「山田橋Ⅱ式」の段階に比定されよう。住居跡の時期は高花編年Ⅳa期。

04ADは、04BDを破壊することから、今回の中では一番新しい（最後）住居となる蓋然性が高い。

05Dは、第16図1の南関東系裝飾壺の口縁部形態に見られる属性が、「山田橋Ⅰ式」に位置づけられることから、住居跡の時期は高花編年Ⅲ期に相当する。

06Dは、床面に遺棄された「仮称 根鹿北式土器」を時期決定資料とし、高花編年Ⅳa期に比定する。「転用器台」として再生した2個体の壺（第18図1・2）をはじめ、高坏（同図13）や甕（同図5）も「山田橋Ⅱ式土器」に位置づけられるので、矛盾しない。これらと甕（同図4）を組み合わせたものが、概ね「土器組成」であったと思われる。そして、「転用器台」の事例が示すように、06Dの住人の居住期間は、高花編年Ⅳa期の存続期間でもある訳で、その時間幅がいかなるものであれ、それよりも短くなることはない。即ち、高花編年Ⅳa期は、06Dの2個体の壺が、「壺としての使用期間→転用器台としての使用期間」という時間幅を、最低有することになるのである。

07Dは、廃屋に伴う廃材の焼却処理行為後の、消火活動直後に土器類の廃棄を集中して行っており、これは周堤が残っている時点であるため、住人の廃品であった可能性が高い。第20図1の壺の口縁部形態に見られる属性は、「山田橋Ⅰ式」のものであるが、同図2を含めて、破片が摩滅している。その点を考慮すると、住人の時期はより新しくなるため、「山田橋Ⅱ式期」=高花編年Ⅳa期に相当しよう。

08Dは、判断材料となる土器が少な過ぎるため、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

09Dは、第22図1の広口壺の口縁部形態に見られる属性が、「山田橋Ⅱ式」に位置づけられることから、住居跡の時期は高花編年Ⅳa期（ないしはそれ以降）に相当しよう。

集落の変遷であるが、時期的には四期に分かれよう。

1期（高花編年Ⅱ期）…………… 今回は該当遺構なし（土器片のみ出土）

2期（高花編年Ⅲ期）…………… 05D

3期（高花編年Ⅳa期）…………… 01D・03D・04BD・06D・07D・09D

4期（高花編年Ⅳa期以降）…… 04AD

1期 今回は土器片のみであるが、未調査部分に埋まっているものと解釈した。

2期 05D1軒のみの検出であるが、未調査部分に埋まっている可能性は否定できない。なぜならば、出土土器の中には「山田橋Ⅰ式土器」も、少なからず認められるからである。この点を加味すると、今回の調査区は、該当期の住人が好んで居住するエリアではなかったと捉えられる。

3期 集落が最も栄えた時期である。6軒の全てが同時存在であるかは不明としても、その居住形態は「大形住居」と「小形住居」の二者が見られ、主軸方向もほぼ同一となっている。この時期は、印旛沼南岸・西岸とも遺跡数（遺構数）が減少するという傾向がある。逆に霞ヶ浦西岸などでは、大規模な集落が営まれるようになる。八千代市域では、烏田台の平戸道地遺跡で比較的大規模な集落が検出されている。村上台では、本道跡を除けば、栗谷遺跡で2軒、上谷遺跡で3軒が検出されたのみである。

4期 04ADが、全ての住居跡の中では一番新しいことから、設定した。この住人は、廃品類を何も残さずに立ち去ったと思われる（移住ないしは移転）。また、02Dの覆土中に廃棄された、古墳時代前期土師器（ひさご形土器）を見る限り、該当期の集落もどこかに埋まっている可能性が極めて高い。

#### 阿蘇中学校東側遺跡との関係

本遺跡と西谷津を隔てて対峙する阿蘇中学校東側遺跡（以下では阿蘇中とする）は、弥生時代後期を中心とする集落遺跡である。阿蘇中は、霊園造成や道路建設に先立ち、過去5次に及ぶ調査が行われており、堅穴住居跡計20軒以上<sup>4</sup>が検出された。本来的には、規模の大きな集落であった可能性が高い。報告を見る限りでは、出土土器に南関東系が比較的目的立つ点など、本遺跡と共通項も少なからずある。第一次001住居跡・第三次第21号住居跡の壺は「帯縄文沈線区画」の技法を持ち、第一次006住居跡の広口壺は口縁部形態から「久々原式期」に位置づけられる。また、第三次第19号住居跡の甕は、頸部と胴部の境に段を有し、段上に横位の結縄縄文を多条化施文しており、本遺跡の第7図9（01D）と近似する資料である。従って、あくまでも予察であるが、阿蘇中は高花編年のⅡ期から集落が盛行し、Ⅲ期までは本遺跡と併存した可能性が高く、Ⅳ期（Ⅳa期）の前に廃絶したのではないかと考えられる。次に、谷津田の経営に関してであるが、阿蘇中と本遺跡は南田谷津と西谷津を共有することから見て、地縁的にも無関係ではないと思われる。両者に共通することは、谷典に営まれた大規模集落ということである。ただし、南田谷津と西谷津自体が比較的幅員の狭い谷津であるため、水稲耕作を行ったところで、米自体の収穫量はあまり期待できなかった可能性が高い。にもかかわらず、比較的大規模な集落が隣り合うように営まれ、ある期間は併存しているという点に、むしろ留意するべきであろう。

要は、「両者（両集落）が平和裏に共存」して行くための経済基盤は何か、ということであって、それを解明することは、今後の課題の一つである。

#### 弥生時代後期集落と古墳時代前期集落との関係

既に、村上台における弥生時代後期の遺跡分布状況は、第1図に示した。

第1章第3節の補足となるが、弥生時代中期後半の遺跡分布は、

⑥粟谷遺跡・⑦上谷遺跡・⑧逆水遺跡・⑨村上宮内遺跡・⑩浅間内遺跡の5個所であったのに対し、後期になると実に四倍以上に増加している。

そして、その立地もまた、印旛沼や新川に面した台地先端付近だけでなく、本遺跡のように谷津の奥まった部分の台地上や、「保品・神野遺跡群」でのいわゆる「弥生ベルト」に見られるような、尾根上や台地の鞍部など、様々なあり方を示すようになる。特に後者の立地は、「水稲耕作を生業にした集団」が集落を営むには、適しているとは言えないのである。やはり、この事象の背景には「人口の増加」とそれに伴う「拡散」を考慮する必要があると思われる<sup>5</sup>。

さらに付け加えると、水稲耕作をメインとした生業のみならず、他の栽培作物に比重を置くことや、少なからず出土する土製紡錘車の評価として、「布」を生産するなどの「新たな産業の萌芽」を認めることができよう。それでいて、「印旛沼周辺地域」というように、エリアを拡大して見た場合は、「小地域圏の分化」と、「土器の表象に脱南関東化」が見られるという、二律背反的な側面を持つ。

ところが、弥生時代の終末には、人口の減少と見なせる程に遺跡数が少なくなるのである。そして、この状況は次の古墳時代の初頭（古墳出現期）にも続いている。この点は留意しておきたい。

大枠なタイムスケールの上での「弥生時代後期～古墳時代前期」で見た場合、集落が営まれている例は、塚廻遺跡・向境遺跡・粟谷遺跡・上谷遺跡・おおびた遺跡・南谷遺跡・村上宮内遺跡の7箇所を数える。ところが、確実に弥生時代終末と古墳時代初頭の両時期にまたがって、遺構・遺物が検出されているのは、粟谷遺跡のみである<sup>6</sup>。その点で本遺跡は、前々項と前項で触れたように、04D及び06Dから、東関東系の上稲吉式土器直前とされる、「仮称 根鹿北式土器」の小形甕及び中形甕と、南関東系の「山田橋式土器」に比定される裝飾壺が相伴しており、時間的に高花編年Ⅳa期、即ち弥生時代の終末（最終末ではないが）に近いという点で注目される。さらに、02D 覆土から古墳時代前期初頭の「ひさご形土器」も出土している。

南谷遺跡の報文でも触れたように（中野他2009）、遅くとも古墳時代前期後半頃になると、大きな谷

## 第4章 成果と課題

津(支谷)を囲む形で遺跡群が、「地縁的な共同体」を形成するようになってくる。その背景の一つとして、「水稲耕作の再開」が想定された。即ち、集団の統合が行われた可能性を示すものである。

南谷遺跡報文の繰り返しになるが、やはり古墳時代を迎えると、「弥生時代的な集落・集団の結びつき(紐帯)」そのものに変化が生じたものと解釈されよう。

### 第2節 殿台遺跡a地点

#### 1. 旧石器時代及び縄文時代の様相

今回の石器群は、産出層率から見て、橋本勝雄氏によるところの、「壹田遺跡群1期」に相当しよう。資料的には少量の出土であるが、文化層のわかる事例が増加したことは、成果として上げてよい。

縄文土器は、やはり少量であるが、隣接する平沢遺跡と時期的に重複しないものを含む。後期中葉加曾利B式期になると、生活エリアに変化が生じた結果を示している可能性がある。

#### 2. 井戸状遺構

「井戸状遺構」は、その形状こそ「井戸」に酷似するが、深度的に地下水の層に達しておらず、覆土の観察からも水を湛えていた形跡は見つからなかった。類例の増加を待って、再検討すべきであろう。

#### 注

- 1) 近年、鈴木徳雄氏により、7段階区分の発展的解消としての、新たな細分案が発表されたため、報告もこれに従うことにしたい。  
鈴木徳雄 2007 「著名寺式土器研究の諸問題」 「第20回 縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討 資料集」 縄文セミナーの会 1頁～8頁
- 2) 大村 直 2004 「市原市山田横大台遺跡」 財団法人 市原市文化財センター
- 3) 高花宏行 2007 「[白井南式]と周辺土器様相の検討」 「研究紀要」5 財団法人 伊藤郡市文化財センター 27頁～50頁
- 4) 八千代市教育委員会による、第二次調査の発掘調査報告書の発行により確定することしたい。
- 5) 加藤壽司 2008 「第三章 弥生時代の八千代 第二節 農村の分散と個性化(弥生時代後期)」 「八千代の歴史(通史編 上)」 八千代市史編さん委員会 138頁～141頁
- 6) 弥生時代終末の遺構・遺物のみは上谷遺跡、古墳時代初期の遺構・遺物は殿内遺跡、遺物のみならば南谷遺跡で検出されている。しかし、ここではあくまでも、弥生時代終末と古墳時代初期の両方の時期にまたがる、という点にこだわるものである。

#### 参考文献(年代順)

- 星 忠他 1980 「阿蘇中学校東側遺跡」 八千代市遺跡調査会  
藤原 均他 1984 「千葉県八千代市 阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ」 八千代市遺跡調査会  
中村哲也 2000 「茨城県稲敷郡美浦村 野中遺跡 - 第2次発掘調査報告書 -」 美浦村教育委員会  
森本和男 2007 「八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡」 千葉県県土整備部 財団法人千葉県教育振興財団  
小玉秀成 2007 「曙ヶ塚古墳群の弥生土器」 「小美玉市史料館報 Vol.1」 小美玉市史料館 115頁～127頁  
中野修秀他 2009 「千葉県八千代市 南谷遺跡発掘調査報告書」 八千代市教育委員会



# 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし ひらさわいせきえーちてん・とのだいいせきえーちてん							
書名	千葉県八千代市 平沢遺跡 a 地点・殿台遺跡 a 地点							
副書名	都市計画道路 3・4・9 号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
編者名	中野修秀・森 竜哉							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田 138-2 TEL.047 (483) 1151 代表							
発行年月日	西暦 2013 年 (平成 25 年) 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平沢遺跡 a 地点	千葉県八千代市高野字平沢 158 番地他	1221	217	35 度 44 分 41 秒	140 度 7 分 41 秒	19950410 ～ 19950630	1,250	道路建設
殿台遺跡 a 地点	千葉県八千代市高野字殿台 149 番 2 地	1221	218	35 度 44 分 32 秒	140 度 7 分 46 秒	19940817 ～ 19941006	確認上層 370 下層 16/3,616 本調査上層 18 下層 50	
						19941221 ～ 19941227	確認上層 160 /1,200	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平沢遺跡 a 地点	包蔵地	縄文時代			縄文土器 (早期～後期), 石器 (石磯)		下総上位面に展開する、弥生後期終末期を中心とする集落跡。	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 10 軒		弥生土器 (南関東系・ 臼井南式・東関東系) 土製品 (密転用器台・ 土製紡錘車) 石器 (石麻・砥石)			
	包蔵地	古墳時代			前期土師器 (ひさご形)			
殿台遺跡 a 地点	包蔵地	旧石器時代	遺物集中箇所 2 地点		石器 (剥片・使用痕のある剥片)		文化層は、立川Ⅱ-B 層下部～IV 層上部。	
		縄文時代			縄文土器 (加曾利 B 式)			
		奈良時代			須恵器 (飯)			
		江戸時代			在地系土器 (焙烙他)			
要約	<p>今回の成果は、以下のとおりである。</p> <p>平沢遺跡は、「下総上位面」上の弥生時代後期を中心とした集落である。竪穴住居跡が 10 軒検出されたが、1 例を除いては重畳関係を持たないものであった。遺構密度が高いので、本来は比較的大規模な集落が存在する可能性が高い。</p> <p>出土した弥生土器は、やや南関東系がメインの組成となっており、在地系他、東関東系も共存している。「臼井南式土器」はごく少量の出土にとどまった。</p> <p>東関東系の中には、口縁部に二列の刺突列を施し、それをまたぐ形で縦長の貼瘤を貼付したところの、いわゆる「仮板 根廣北式」と呼ばれているものを含む。</p> <p>時間的には、後期後半～後期末までが中心となるが、破片では後期前半も出土している。そのため、遺跡全体から見た集落の開設時期は、後期前半まで遡る可能性が高い。</p> <p>遺構は検出されなかったが、縄文土器 (早期～後期)・土師器 (古墳時代前期ひさご形土器) が出土でき、平沢遺跡の土地利用史を物語る。</p> <p>殿台遺跡は、少量の出土ではあったが、旧石器については「萱田遺跡群第 1 期」の、縄文時代については、後期中葉の資料を得た。井戸状遺構については類似を待ちたい。</p>							

千葉県八千代市

平沢遺跡 a地点・殿台遺跡 a地点

— 都市計画道路 3・4・9 号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 24 年度

---

発行日 平成 25 年 3 月 25 日  
編 集 八千代市教育委員会  
〒 276-0045 八千代市大和田 138-2  
TEL. 047-483-1151 代表  
発 行 八千代市教育委員会  
印 刷 株式会社 山下印刷

---